

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：34420

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22402043

研究課題名(和文) ウガンダ・アルバート湖岸の漁村に生成する共同性 移動と漁労に住まう人びと

研究課題名(英文) The Creation of Cooperativities in Fishing Village along Lake Albert in Uganda: People in Mobility with Fishery

研究代表者

田原 範子 (Tahara, Noriko)

四天王寺大学・人文社会学部・教授

研究者番号：70310711

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,500,000円、(間接経費) 3,450,000円

研究成果の概要(和文)：多民族が混住するアルバート湖岸における人びとの移動は、ウガンダ・コンゴ・ルワンダというトランスナショナルな空間に配置されること、一方で、アルル人コミュニティと共催した死者祈念儀礼においては、従来のトランスナショナルな共同性に代わり、国家内における血縁関係を基盤にした新たな共同性が発露すること、また共同性の発現においては呪術的空間と現実空間のかい離が生じることを明らかにした。
本研究の成果の一端として、死者祈念儀礼のドキュメンタリー映像を制作し、ウガンダと日本で上映し、儀礼の次世代への継承と研究成果のフィードバックを試みた。

研究成果の概要(英文)：We have traced back the life world of immigrants historically constructed in the multi-ethnic village in the shore of Lake Albert to analyze the transformation under the pressure of colonization, civil wars and globalization and found the people's trajectories are spread over the border of nations of Uganda, D.R.C. and Rwanda.

Also we have found the alternation and re-creation of cooperativities which are characterized by transnationality, through the attempt of performing the myel agwara, the last stage of mourning ritual. Through the experience of performing myel agwara with the people of emigrated village, we can point out the scepticism among people about the practice relating to spiritual world, which is ancestor's worship. Lastly, we have shown the screening documentary film of myel agwara at this village and other research sites in Uganda and some academic meetings in Japan to share the intangible culture with other people.

研究分野：社会科学C

科研費の分科・細目：基盤研究(B)(海外学術調査)

キーワード：移民社会 漁労 共同性 トランスナショナルリティ 大湖地域 アルバート湖 ウガンダ共和国

1. 研究開始当初の背景

東アフリカ・ウガンダ共和国のアルバート湖岸地域の移民社会は、周辺地域の紛争のなかで1960年代に誕生し1980年代後半にウガンダの地方政治組織と市場に組み込まれた。社会秩序の再編成・流動化のなかで人びとは、複数の生活拠点と多重的な帰属によるライフスタイルを実践している。

(1) 大湖地域の一部としてのアルバート湖

大湖地域では、ルワンダを中心として紛争、難民、移民が循環的に生み出されてきた。本研究の調査地は、ニョロ人が最大民族集団でありながらも移民アルル人が住民の大半を占める「移民社会」であり、民族間の対立は常に緊張状態にある。歴史的・政治的な社会背景のなかで人びとに選び取られた生業は、狩猟スタイルの漁労であった。漁村間の移動を常態とする生活スタイル、つまり移動と多重的帰属（複数の生活拠点）に特徴づけられる生活様式は、アルバート湖岸漁村の人びとの生活戦術となっている現状がある。

(2) 宗教儀礼の変容

1950年代の学術的報告によれば、アルル人の日常生活世界において、ジョクとアピラとよばれる祖先崇拝の概念が重要な意味をもっていた。それらに関連する宗教儀礼は、人びとの親族および出身地域の紐帯の結節点となってきた。1997年以降、アルバート湖の定期ボート運行により移動は加速され、移動先で祖先崇拝儀礼を行う頻度は少なくなってきた。また移民の送り出し先である故郷においても、最終段階の死者祈念儀礼は1980年代以降、行われていないとの報告があり、祖先崇拝儀礼は変容の過程にあった。

(3) 湖岸の制度化と民族間の対立

ウガンダの湖をめぐって、一方に外貨獲得のために水産資源保全を最優先課題とする国家があり、他方に日々の生活のために漁労に勤しむ人びとがいる。水辺の問題の解決を地元主導で進める目的で、ウガンダ水産資源省は、2004年にBMU(岸管理単位)を導入した。しかし、BMUという新たな制度化は漁村の生活世界に変化をもたらし、とりわけアルバート湖岸においては、BMUと漁労者の対立に加えて民族間の葛藤が重ねあわされることになった。

2. 研究の目的

本研究は、人、もの、情報の移動が日常化し、価値の多様化と同時に一元化が進行するグローバル化社会において、マクロな社会変動に対応する人々の生活世界を社会学的に調査研究することを企画したものである。

具体的には、アルバート湖岸地域で、数世代にわたる移動、それに伴って複数の生活拠点への帰属を常態とする移民たちのローカルな生の技法に焦点を絞った。移民たちは、

移動先の社会空間で他民族といかなる共同性を構築するのか、また出身地の文化や慣習を維持・変容させているのかを、フィールドワークをとおして読み解くこと、その上で研究成果を共有するために、研究経過と成果を映像化し、現地と国内で上映活動することを目的とした。

3. 研究の方法

移動の過程で多民族と共生する人びとが生成する共同性を把握すること、変化する慣習を映像化すること、そうした成果を調査者/被調査者/研究者/漁労民/一般市民と共有することを試みた。そのため、フィールド調査班・映像編集班・研究成果還元班を組織し、研究代表者が統括し、計画を三段階に分けて実施した。

(1) フィールドワークの実施

漁村の「生活世界」を、アルル人、アチョリ人、ルワンディーズ人など生業を異にする人びとに対してインタビュー調査を行い、歴史的背景における個人の空間的移動を描き出すことを試みた。

最大民族集団であるアルル人の出身地域において、ジョクとアピラの祖先崇拝に関連する儀礼をビデオカメラにより撮影し記録した。

(2) ドキュメンタリー映像の作成

ビデオによる資料をドキュメンタリー映像として編集するために、国際的なドキュメンタリー映像祭や映像資料のアーカイブを訪問し、具体的な知見を得た。その上で、フィールド資料を編集・映像化した。

(3) 研究成果の共有

日本での研究会だけでなく、調査レポートを英語で執筆することで、現地の人たちと調査結果を検討する場を設けた。また映像をウガンダの調査地と大学、日本の大学および映像研究会で上映することで、研究成果のフィードバックを図った。

4. 研究成果

研究成果として、以下の4つをあげることができる。

(1) 空間的移動と社会的出来事の関連性

生業を異にしてはいても、個々人の空間的移動は、保護領化、政治的危機、内戦などの社会的出来事に大きく影響を受けていた。

1930年代、人頭税の金納化のため、人びとは綿花とコーヒーのプランテーション労働のために、故郷を離れた。1964年のコンゴ動乱、1984-85年のムセベニ内戦、1986年-2003年の「神の抵抗軍」による北部における内戦、1997-2002年のコンゴ市民戦争から、逃れるため、もしくは戦争時の混乱において

牛や財産等を失ったため、アルバート湖畔の漁村に到着している。それぞれの移動をウガンダ共和国・コンゴ民主共和国・ルワンダ共和国という国境を越えた空間において描きだすことができた。

(2) 死者祈念儀礼ミエル・アグワラの再生

初年度の2010年より、アルバート湖岸の漁村および出身地の諸農村において、本研究チームと長老組、成年組、女性組が準備会議を5回重ねた。本儀礼の実施は25年ぶりであり、さまざまな困難を経験したが、2012年3月にミエル・アグワラという死者祈念儀礼の最終段階にあたる儀礼を実施することができた。

(3) 共同性の変容と新たな共同性の発露

社会学的理論への貢献として、ミエル・アグワラ儀礼の実施により、共同性の変容と新たな共同性の発露を明らかにすることができた。従来のミエル・アグワラは、コンゴ民主共和国の同族集団と共に実施され、国境を越えた共同性によって実施されてきていた。しかし今回の実施においては、準備会議ではコンゴ民主共和国から参加者が集まっていたにもかかわらず、儀礼においては国境という枠組みを超えることができなかった。それに代わり、ウガンダ国内の曾祖父を共通とする血縁集団から協力を得ることで実施が可能になった。当事者たちが予想だにできなかった展開のなかで、国境という枠内における新しい共同性の発露を明らかにすることができた。

また、共同性の発現において、呪術的空間と現実空間の乖離も観察された。従来のミエル・アグワラ儀礼は、アンバヤとよばれる呪具によって儀礼を通して作られた空間における音楽を伴う儀礼であった。しかし、今回の儀礼において、呪具による時空間と楽器（アグワラ・ンダラ）による時空間は、まったく乖離していた。

呪術的営みに対する人びとの態度は、死者の霊ティポにかかわる行為への懐疑的態度と表裏一体のものと考えられる。こうした乖離が、死者祈念儀礼を25年間実施しなかった遠因の一つと考えることができる。

(4) ミエル・アグワラ儀礼の映像化と共有

ミエル・アグワラ再生の目的の一つは、儀礼の次世代への継承であり、それを他者と共有することであった。調査地を含めて、ウガンダと日本、いろんな機会を捉えて上映会を行うことを通して、当研究成果の一端を、当該社会にフィードバックできた。

(5) 各年度の研究成果を簡略にまとめる。

平成22年(2010年)度

2010年4月に研究会を実施し、新たな生活理論の学術的基盤について検討を行い、社会学、人類学だけではなく、民俗学を射程に入

れた生活理論構築の必要性について確認できた。

研究チームが手分けして、フランスの国立国会図書館INAおよびトルコのイスタンブールドキュメンタリー映像祭を見学し、民族資料の映像化をめぐる国際的な論議を踏まえて制作編集を進めるための知見を得た。

2010年7月・8月、2011年2月・3月に研究代表者と研究協力者がウガンダ共和国でフィールドワークを実施し、参与観察とインタビュー調査を行うと同時に、漁りかわる儀礼、漁民たちの精神世界にかかわる儀礼をビデオカメラによって撮影し記録した。

平成23年(2011年)度

英国人類学会民族誌映像祭に田原範子・石田佐恵子が、山形国際ドキュメンタリー映像祭に田原範子・石田佐恵子・松居和子・播磨美奈が参加し、民族誌映像制作にかかわる資料の収集、民族誌映画制作者との交流を行うことができた。

2011年8月、湖岸管理政策の変化が湖岸に及ぼす状況を知るためにフィールドワークを実施した。ウガンダ政府の漁業政策を徹底するために組織された実戦部隊が、湖上での取り締まりを強化した結果、漁民たちは魚市場の開催曜日を変更したり、開催場所を隠蔽したりすることで厳しい取り締まりに対処していることが明らかになった。

死者祈念儀礼の準備のために、2011年8月(ミエル・アグワラ第二回会合)、2011年12月~2012年1月(ミエル・アグワラ第三回会合)、2012年2月~3月(セレワ儀礼)に、田原範子・岩谷洋史・柏本奈津が参加し、儀礼の準備過程と儀礼を撮影した。また映像のフッテージを、調査地で上映することで、被調査者と研究成果の共有をすることができた。

平成24年(2012年)度

日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本社会学会に出席し、民族誌映像制作にかかわる資料を収集し、民族誌映画制作者と交流を深めた。

ウガンダでのフィールドワークは、2012年8月、2013年2~3月に実施した。湖岸管理政策は、昨今の移民の増加のなかで、より取り締まりを強化している。また、石油採掘企業による周辺地域の道路整備が急速に進められて、物流やマーケットの状況にも変化がもたらされていることが明らかになった。

研究チーム内で、これまでの研究成果を共有し、来年度の課題を議論するために、2013年3月16日に研究会を実施した。

研究報告は「漁業と周縁性：ウガンダ、カンパラのNスラムの市場とケニア、トゥルカナ湖の事例から」(森口岳)、「ウガンダの60年代~70年代の政治シーン：オボス=オブンビ家文書からみた」(梅屋潔)、映像上映は「Seven Songs for Mourning: Myel Agwara

Among Alur」(柏本奈津・田原範子)「グローバル化時代における芸術：フィジーの劇団を事例として」(岩谷洋史)を行った。

平成 25 年(2013 年)度

死者祈念儀礼ミエル・アグワラのドキュメンタリー映像を制作し、英国民族誌映像祭、山形国際ドキュメンタリー映像祭に出品したが、採択には至らなかった。研究チーム 5 人が山形国際ドキュメンタリー映像祭に参加し、民族誌映像の制作について論議し、今後の課題を確認した。

研究成果を共有・公開するためにホームページの充実を図り、ウェブ上で短い資料映像を視聴できるように整えた。

アルバート湖岸のフィールドワークにおいて、漁労省(ウガンダ政府)による漁労と市場管理の強化に伴って生業の転換(漁労から綿花栽培へ)、居住地の変更(漁村から他の漁村へ)が加速していること、また漁民だけではなく魚の流通・販売にかかわる人々が魚マーケット開催日を戦略的に変更していることが明らかになった。マクロな社会変化を背景に、村内のミクロな生活世界では漁労民のアルル人と牧畜民のルワンディーズ人の対立が先鋭化し、殺人事件へと発展した。

移民社会における殺人事件は、大湖地域という空間的配置にある当該地域の特徴をあらわにするものである。

本研究では、主に最大民族集団のアルル人の歴史的背景に焦点を絞って、宗教儀礼等の変容・共同性の生成を研究してきたが、最終年度において、他の民族の歴史的背景を把握することの必要性が明らかになった。2013 年 2 月にはルワンディーズ人の送り出し先であるルワンダ共和国でフィールドワークを実施し、牧畜民の移動に関する歴史的経緯について情報収集を行い、2014 年 5 月の国際民族学人類学(IUAES2014)で報告した。共同体の生活理論の構築において、歴史的経緯および空間的配置に基づいた個別のアプローチが必要であることを指摘できた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 12 件)

梅屋 潔 2014 「ウガンダ東部アドラ民族における okewo の儀礼的特権 現地語(Dhopadhola)資料対訳編」『人間情報学研究』第 19 号、9-28 頁。

梅屋 潔 2014 「「物語論」から「象徴論」、そして「アート・ネクサス」へ? 「憑きもの」および民俗宗教理解のために」『現代民俗学研究』第 6 号、現代民俗学会、5-26 頁。

Tahara Noriko, 2013, Preparing Myel Agwara for Cezario Oungi Uni(2): From Myel Agwara to Selewa" *The Bulletin of*

Shitennoji University, Vol. 56, pp. 439-470.

梅屋 潔 2013 「「憑きもの」研究の理論的展開を占う 近藤論文へのコメント」(「魅了される遭遇」から生まれる動物信仰 隠岐の島町某地区 0 家の事例から」『現代民俗学研究』第 5 号掲載)『現代民俗学研究』第 5 号、現代民俗学会、87-94 頁。

Tahara Noriko, 2012, "Preparing Myel Agwara for Cezario Oungi Unu: An Overview of the First and Second Meetings," *The Bulletin of Shitennoji University*, pp. 387-406.

石田 佐恵子 2012 「ビジュアルデータ・アーカイブズを用いた二次分析の可能性 <特集> データ・アーカイブと二次分析の最前線」『社会と調査』8 号。

梅屋 潔 2012 「アフリカのある村における死霊の観念と施術師、そして呪い歌」『地域構想学研究教育報告』第 2 号、70-80 頁。

田原 範子 2011 「移動に住まう人びとはどこに埋葬されるのか 東アフリカ・ナイロート系アルル人のティボ、ジョク、アピラをめぐって」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 169 号、167-208 頁。

梅屋 潔 2011 「ある遺品整理の顛末 ウガンダ東部トロロ県 A・C・K・オボス=オブンビの場合」『国立歴史民俗博物館研究報告』169 集、209-240 頁。

梅屋 潔 2011 「私と『地域』とのおつきあい」『地域構想学研究教育報告』第 1 号、63-70 頁。

Tahara Noriko, 2010 "Converting Life-world in Pursuit of Sauce, Space and Source: People's Trajectories and Spaces in Uganda" *The Bulletin of Shitennoji University*, Vol. 50, pp. 249-262.

梅屋 潔 2010 「佐渡ムジナと私、そして追悼レヴィ=ストロース 『構造主義』からの落ちこぼれの証言」『比較日本文化研究』第 14 号、56-74 頁。

[学会発表](計 7 件)

Tahara Noriko, 'People's Trajectories and Spaces in Uganda: Re-construction of Myel Agwara Among Alur', 17th World Congress 2013 of The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences: Evolving humanity, emerging worlds, Movement, mobility and migration: Migration and indigenous peoples (MMM07), Manchester University, UK 2013 年 8 月 8 日

Umeya Kiyoshi, 'What is the source of power?: A Case of the evangelized witch in eastern Uganda,' Panel G20

(convenors: David Parkin, Akira Okazaki, and Katsuhiko Keida), Trust in super-diversity. The 17th World Congress of the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences, IUAES2013, University of Manchester, 5th-10th August 2013, Conference Programme, pp.127-128, 2013年8月6日

田原範子「ミエル・アクワラ儀礼の歌についての社会学的考察—西ナイル・アルル人の生活世界」日本文化人類学会 第47回研究大会(慶応大学) 2013(平成25)年6月9日

Tahara Noriko, Kashiwamoto Natsu, 'Screening: "Seven Songs for Mourning: Myel Agwara among Alur" 54min. Visual Anthropology Forum, Anthro-film Laboratory 8, Academic Extension Centre at Osaka City University 2013(平成25)年4月25日

Tahara Noriko "How Peoples cope with the Cotton matter: From the Case of Fishing Village in Lake Albert" Kyoto International Seminar 2012, "Re-Creating Communities in a Globalized Setting" (京都大学芝蘭会館) 2012(平成24)年11月24日

田原範子「ポピュラー文化ミュージアムとは何か(4) 異文化のアート化とポピュラー化」第85回日本社会学会大会(札幌学院大学) 2012(平成24)年11月3日

田原範子「生活世界の映像記述とは何か アルバート湖岸漁村の描出を通して」関西社会学会・ポスターセッション(名古屋市立大学) 2010年5月30日

〔図書〕(計4件)

田原範子 2013「エスニック関連のミュージアム 生成される真正性」『ポピュラー文化のミュージアム』(257-282頁) ミネルヴァ書房。

(に同じ) 石田佐恵子 2013「越境するポピュラー文化ミュージアム グローバル化/デジタル化時代の展望」『ポピュラー文化のミュージアム』(291-315頁) ミネルヴァ書房。

田原範子 2012「アルバート湖畔の漁民の生活 月・星・風に導かれるハンターたち」(121-126頁) 「水産資源管理計画と漁民 センターマスターから BMUへ」(219-223頁)(吉田昌夫・白石壮一郎編著)『ウガンダを知るための53章』明石書店。

(に同じ) 梅屋潔 2012「大湖地方の王国の盛衰、牧畜民の移動 保護領化以前」(48-53頁)「死者を葬る 農村の災いと死、そして施術師について」(176-180頁)(白石壮一郎・吉田昌夫編

著)『ウガンダを知るための53章』明石書店。

梅屋潔 2011「グローバル化と他者 今日フィールドワークとは?」『文化人類学のレッスン フィールドからの出発[増補版]』233-256頁。

梅屋潔 2010「酒に憑かれた男たち ウガンダ・アドラ民族における酒と妖術の民族誌」『人=間の人類学』15-34頁。

〔その他〕

ホームページ「Uganda Book」

<http://uganda.sakura.ne.jp/book/index.html>

6. 研究組織

フィールド調査班・映像編集班・研究成果還元班を組織し、研究代表者が統括した。

*フィールド調査班: 梅屋潔、森口岳、松居和子、キルミラ・エドワード、オウンギ・ジェナロ、アジヨレ・バティスタ

*映像編集班: 石田佐恵子、柏本奈津、岩谷洋史、パロレ・スウィジン

*研究成果還元班: 斉藤敏之、柏本美智子、播磨美奈

(1) 研究代表者

田原 範子 (Tahara Noriko)

四天王寺大学・人文社会学部・教授

研究者番号: 70310711

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

石田 佐恵子 (Ishita Saeko)

大阪市立大学大学院・文学研究科・教授)

研究者番号: 70212884

梅屋 潔 (Umeya Kiyoshi)

神戸大学大学院・国際文化研究科・准教授

研究者番号: 80405894

* 研究協力者

岩谷 洋史 (Iwatani Hirofumi)

国立民族学博物館・機関研究員(当時)

柏本 奈津 (Kashiwamoto Natsu)

大阪市立大学・万年社プロジェクト(当時)

柏本 美智子 (Kashiwamoto Michiko)

大阪府堺市立榎小学校(当時)

斉藤 敏之 (Saito Toshiyuki)

四天王寺大学・短期大学部・准教授

播磨 美奈 (Harima Mina)

兵庫県国際交流協会(当時)

松居 和子 (Matsui Kazuko)
京都大学・文学研究科・研究助手

森口 岳 (Moriguchi Gaku)
東洋大学・非常勤講師

* 海外共同研究者

キルミラ・エドワード (Kirumira Edward)
マケレレ大学・社会科学部・学部長

アジョレ・バティスタ (Ajore Batista)
アルバート湖ルンガ村・湖岸管理単位長

オウンギ・ジェナロ (Oungi Jenaro)
ネビ県アルル人コミュニティ・会員

バロレ・スウィジン (Barole Swizin)
ホイマ県ニョロコミュニティ・事務担当官